

令和4年度 吉田町総合教育会議 会議録

- 1 開催期日 令和4年11月14日(月) 午後2時00分
- 2 場 所 吉田町役場5階 会議室2
- 3 出席者 田村 典彦 町長、山田 泰巳 教育長
塚本 成男 教育委員、北澤 雅恵 教育委員
増田 真也 教育委員、中村 成宏 教育委員
事務局 糸田 真男 学校教育課長、中山 孝宏 生涯学習課長
水嶋 浩之 主席指導主事、谷澤 宏昭 指導主事
山村 加奈子 教育総務統括、榛葉 知美 教育振興統括
- 4 議事内容

1 開会

○事務局

開会に先立ち相互のあいさつを交わしたいと思います。一同御起立をお願いします。一同礼。御着席ください。

ただいまから、令和4年度吉田町総合教育会議を開会します。本日はお忙しい中御出席を賜りまして誠にありがとうございます。本日の進行を務めさせていただきます吉田町教育委員会学校教育課の糸田と申します。よろしく願いいたします。

早速ですが、お手元にお配りした資料の次第に沿って進めさせていただきます。始めに、吉田町長から御挨拶申し上げます。

(1) 町長あいさつ

○田村町長

皆様こんにちは。お忙しい中、総合教育会議に御参集いただきましてありがとうございます。円安ということが、いろいろなところで聞かれています。この円安というのは、円を売る人が多くて、円を買う人が少ないからこういうことになるわけですが、そこここに、いろいろな議論が出ますけれども、日本の知的レベルが下がっていると。かつて、よく世界中のものを一手に引き受けた時代があるのですが。その時代は、日本というのはものすごかったのです。しかしながら、今日本の技術などが、そういう世界的な傾向から見て、非常に

低下していると。円が売られるというのは、国力が低下していく。その国力が低下していくというのは、基本になるのは学力の問題、知的レベルの問題。これが大きく円安に作用していると私は思います。そういった意味で、これからの日本の将来を担う子供たちの学習環境を良くしていけば、学力が伸びていき、学力が上がっていけばという、そういうことは大きな問題でございますので、ぜひとも皆さんにおかれましても、そういった観点から御意見をいただければありがたいと思っています。どうぞよろしく申し上げます。

○事務局

ありがとうございました。続きまして教育長から御挨拶をいただきます。

(2) 教育長あいさつ

○山田教育長

改めましてこんにちは。先週は視察研修で春日井の方まで行っていただいてありがとうございました。そこでも話がありましたが、教育を語る時は大体、「主語は子供」ということがいつも言われています。子供たちが主体的に学んでいく。そうした姿勢というか、学ぶ姿勢をつくっていくためには、どうすればいいのかと考えると、教職員がその気にならなければいけないし、学校がその気にならなければいけないし、行政が何ができるかを考えなければいけないというところになってくると思います。今日は総合教育会議ということで、教育委員の皆さんと町長を交えて意見交換をさせていただきますので、私たち行政としてどんなことができるのか。今町長から話があった、学力の向上を目指す時にも、我々としてどんなことができるのか。今学校に何が必要なのか。そのようなことも意見交換をしながら、今日の柱はTCPトリビンスプランと、今話題になっている部活動の地域移行という2点に絞って話をしていきますので、ぜひ皆さんからも忌憚のない御意見を出していただいて、今後の吉田町の教育を考えていければと思っています。どうぞよろしく申し上げます。

○事務局

ありがとうございました。それでは議事に入ります。ここからの議事進行については田村町長に申し上げます。

2 議事

(1) TCPトリビンスプランについて

○田村町長

それでは、次第に沿って進めていきます。最初にTCPトリビンスプランに

ついてを議題とします。実はこの会議の進行なのですが、いつも私が皆さんに振るのですが、そういうことではなくて、自由闊達に、最初には振りますが、それ以降は、皆さんそれぞれで自由にフリートーキングのような形でやった方が面白いと思いますので、もしこの趣旨に御賛同をいただけるのであれば、そういう趣旨でまいりたいと思いますのでぜひともよろしく願いいたします。

では、事務局の説明をお願いいたします。

○事務局

では私、桑田から説明させていただきます。始めにTCPトリビンスプランについて御説明いたします。資料につきましては、お手元の資料No.1からNo.5になります。

TCPトリビンスプランは、教職員、子供、保護者の3者が共に利益を得て、3者共益となるよう町の教育方針として定めたもので、平成29年2月の総合教育会議において合意され、実施されてきたプランです。その後令和元年度の総合教育会議において提示されました、令和2年度から5年度までの4年間を一区切りとした今後の方向性などについてまとめた冊子に基づいて、教育委員会では事業を実施してきたところでございます。昨年度の総合教育会議においては、令和3年度のTCPトリビンスプランの取組状況、それから今後の方向性について確認の上、本プランを継続していくことで合意いたしました。本日は教職員及び保護者のアンケートを先日行いましたので、その結果を報告させていただき、併せてプランの目標にあります全国学調の結果、教職員の勤務時間の実態、それから、各小中学校で実践している総合的な学習の時間、吉田探究について御確認をいただきたいと思います。その後委員の皆様へ御協議をいただければと思いますので、よろしく願いいたします。

まずは、資料No.1になりますが、こちらはTCPトリビンスプランでうたっている三つの柱と、これを支えている基盤的整備を示している概要版です。このTCPトリビンスプランの事業内容の評価につきまして、本年9月26日から10月4日までの間に、教職員と保護者に対してアンケートを実施しましたので、そのアンケート結果の資料が資料No.2-1とNo.2-2になります。資料No.2-1は、昨年度も同様のアンケートを実施しておりますので、昨年度と本年度の比較ができる表となっています。資料No.2-2は、本年度の結果を円グラフにしたものと、教職員や保護者の皆様から具体的に示された意見を掲載しているものでございます。

それではまず、町内小中学校の教職員、114人から回答をもらったアンケート結果のうち、TCPトリビンスプランの一つ目の柱、「子供の確かな学力を保障する環境づくり」に関する質問、七つについて御覧いただきたいと存じま

す。七つの質問共に肯定的な意見A、B合わせて80%を超えている状況です。一つ目の「授業日の平準化により、教職員の授業準備時間の確保や、学力保障につながっている」という質問に対して、A、B合わせて81.5%。二つ目の「ALTの配置は子供の英語学習の充実につながっている」は、A、B合わせて97.4%。三つ目の「小学校のプログラミング教材は、子供の思考を高めることにつながっている」が、A、B合わせて80.0%。四つ目の「中学校の中間テストは学力の向上につながっている」は、A、B合わせて86.5%。五つ目の「教員補助の配置や、公設学習塾の開設は、学力向上につながっている」が、A、B合わせて93.0%。六つ目の「教員補助や外国人児童生徒相談員の配置は、個に応じた支援の充実につながっている」は、A、B合わせて97.4%。七つ目の「幼児教育カリキュラムや吉田探究は、つながりのある教育を推進する核となっている」は、A、B合わせて84.2%と、いずれも高い評価をいただいています。

このように教職員のアンケート評価を見ますと、確かな学力を保障する環境づくりは、概ね満たされているところですが、この確かな学力の指標については、全国学力・学習状況調査の平均正答率が県平均以上となっていますので、その結果については、資料No.3を御覧いただきたいと思います。

全国学力・学習状況調査の平均正答率の経年比較についてということで、平成25年から今年度までの小学校と中学校の静岡県との比較をグラフにしてあります。表の中で着色されているものが、県平均を上回った時となりますので、その時の教科は目標が達成されていることとなりますが、着色がなくてマイナスの表示があるものについては、県平均以下となりますので、目標には達していないこととなります。経年で見ていきますと、小学校はおよそ隔年で県平均以上となっており、中学校は残念ながら一度も県平均に達していない状況です。中学校は平成25年度以降、一度も県平均に到達していませんが、徐々に平均値に近くなっており、昨年度は平均値に一番近い値まで来ていたところでしたが、本年度はまた下がってしまった状況にあります。

TCPトリビンスプランで実施している授業日の平準化や、人的支援に対する教職員の満足度は高いけれども、指標としている全国学調の県平均以上の正答率にはなかなか届かないという現状となっています。

次に、資料No.2-1にお戻りください。裏面の2ページになります。資料No.2-2で言うと、6ページからになります。TCPトリビンスプランの二つ目の柱、「教職員が授業等に専念できる環境づくり」に関する質問四つについて御覧いただきたいと思います。四つの質問共に肯定的な意見A、B合わせて高い数値となっています。一つ目の「授業日の平準化により教職員の超過勤務時間の削減につながっている」という質問に、A、B合わせて79.0%。二つ目

の「学校閉庁日の設定は、休みやすい環境を整えるのに効果的である」は、A、B合わせて97.4%。三つ目の「校務アシスタントや学校用務員、部活動指導員の配置は、教職員の多忙化解消につながっている」は、A、B合わせて96.5%。四つ目の「教職員の研修会は、資質能力の向上につながっている」は、A、B合わせて93.8%と、こちらも高い評価を得ています。このように教職員のアンケート評価を見ますと、教職員が授業等に専念できる環境づくりは、概ね満たされているところではございますが、ここでの指標は、指標1として超過勤務時間が月80時間を超える教職員は0人、指標2として、月当たりの超過勤務時間の年間平均は45時間となっていますので、この実態を御覧いただきたいと思えます。

資料No.4の1ページ目の時間外勤務時間が、1か月当たり80時間を超えた教職員人数の推移というページでございます。1が平均人数、2がその割合を表しています。指標としては、80時間を超える教職員は0人としており、本年度において0人にはなっていない状況ですが、平成28年度から比較すると大きく人数が減っております。ただし、本年度10月分までの中学校については、増えている状況にあります。中学校が本年度増加しているのは、昨年、一昨年とコロナ感染症の影響で、部活動を実施しない時期が数か月続いたことから、令和2年度と3年度は急激に減ったのですが、本年度、コロナ前の令和元年度と同様の部活動を展開していることが増加の要因と考えられます。しかしながら、この中学校の増加数は、令和元年度の数値よりは大幅に少ないと言えますので、削減の効果は出ていると考えます。

2ページを御覧いただきたいと思えます。こちらは、教員1人当たりの時間外勤務時間数の推移でございます。真ん中の2が1か月の平均時間数ですが、指標となる45時間までは、小中学校共に到達はしておりませんが、これまでの推移を見ると、年々超過勤務時間が下がっており、45時間に迫っている状況にありますので、働き方改革はある程度認められるのではないかと考えます。中学校の本年度の増加は、先ほどと同様に部活動による影響と思われれます。

次に、資料No.2—1にお戻りいただいて、3ページ。資料No.2—2では、11ページになるわけですが、ここを御覧いただきたいと思えます。児童生徒の保護者848人から回答をいただいたアンケート結果のうち、TCPトリビンスプランの三つ目の柱、「保護者、家庭のニーズに応じた環境づくり」に関する質問、三つについて御覧いただきたいと存じます。三つの質問共に肯定的な意見、A、B合わせて高い数値となっています。一つ目の「学校給食実施日の増加は、保護者の負担軽減につながっている」という質問に、A、B合わせて94.3%。二つ目の「小学校における放課後の居場所がある」は、A、B合わせて85.2%。三つ目の「子供や保護者への相談体制の整備」は、A、B合

わせて85.8%と、どちらも高い評価を得ています。この保護者、家庭のニーズに応じた環境づくりに関する指標としては、保護者の学校教育に対する満足度としており、その満足度の割合が80%以上としておりますので、指標に到達している状況となっております。今後ともこれらの事業を推進しながら、学校の実態も踏まえて効果的に継続していく必要があります。

以上が、TCPトリビンスプランの三つの柱となりますが、この三つの柱を支える「基盤的整備」の評価について、教職員と保護者に三つの質問をしていますので、その結果を御覧いただきたいと思っております。資料No.2-1の2から3ページと、資料No.2-2では8ページからとなります。三つの質問のうち、特に(1)と(2)が、肯定的な意見が極めて高い数値となっております。

一つ目の「エアコンの完備、トイレの洋式化等の満足度」についての質問に、A、B合わせて教職員は100%、保護者は97.7%です。二つ目の「1人1台端末の整備、電子黒板、Wi-Fi環境の整備の満足度」は、教職員が99.1%、保護者が91.7%と非常に高い数値となっておりますので、教職員、保護者共に環境整備については、高い満足度を持っているということが言えます。基盤的整備の三つ目の質問、「コミュニティ・スクールの整備」につきましては、本年度から各小中学校で始まった事業となりまして、各学校に学校運営協議会を設置して、学校と地域の連携によって、教育活動が目標に沿って効果的に展開していくことができるようになってきているかという内容となっております。「コミュニティ・スクールを導入したことは、学校と地域との連携が深まると共に児童生徒が楽しく学校生活を送ることにつながっている」という質問にA、B合わせて教職員が85.9%、保護者が76.5%で、先ほどのハード整備と比較すると低いですが、まだ本年度始まったばかりで、保護者の中の認知度もまだ浸透し切れていない状況ですので、今後のコミュニティ・スクールの展開に期待したいところです。以上、TCPトリビンスプランの本年度のアンケート実施結果について、説明をさせていただきました。

資料No.5については、小中学校のつながりのある教育の軸として進めている各小中学校の総合的な学習の時間、吉田探究の今年度の実施内容を挙げている資料となります。詳細な説明は省かせていただきますが、令和元年度から各学校で実施してきた吉田探究が、年々地元の企業の皆様の御協力を得ながら、成熟した内容となってきておりまして、現在地元企業の御協力に加えて、他市町の学校や自治体とオンラインを活用しながら交流したりと、様々な形でより広域的に総合的な学習の時間を進めておりますので、学習指導要領にある主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善や、個別最適で協働的な学びの一翼を担っている重要な事業だと考えます。本日の皆さんの御協議の参考としていただければと思いますので、よろしく願いいたします。

簡単ではございますが、事務局からの説明は、以上でございます。

○田村町長

ありがとうございました。では、これから皆さんの御意見を伺いたいと思います。TCPトリビンスプランの中でも、特に子供の確かな学力を保障する環境づくりを中心に協議していきたいと思います。

つきましては、皆さんから、このまま継続した方がよいこと、逆にもっと改善した方がよいことの御意見や、教育委員として、さらに保護者としてどう思うか等をお伺いしたいと思いますがいかがでしょうか。

私からまず最初に言わせていただきたいのですが、先生がTCPトリビンスプランについてどう思うかですが、教職員の評価は非常に良いですね。そうすると先生の残業時間は平成28年度から比べると、非常に下がっているのですよね。先生は諸手を挙げていいと言っているわけですよ。にもかかわらず、結果につながらないのですよね。何でそうなのか説明をしてもらいたいと思うのですよ。単純な話、小中学校の校長は例えるなら経営者ですね。そういう観点から見た時に、学力・学習状況調査の点数が、依然として県平均を超えないのですよ。学習環境はいいけど、結果が伴わない。分かるような分析結果を出してもらいたいのですよ。教育長には何度も言っているのですけれどもね。そういうふうなことを考えた時に、一体全体どう関係しているのか、それとも別の要因なのか。よく教育長に言うのは、新井紀子さんの「教科書が読めない子どもたち」という著書があるのですが、要は単純な話、読んでも何が書いてあるかが分からないのです。学力というのは、基本的に理解力なのですよね。文章を読んで、そこに何が書いてあるか、それについて答えると。子供の確かな学力のための環境づくりはいいのだけど、結果が伴わないのがどういうことなのだろうと。

○塚本委員

町長がおっしゃるとおりだと、私も常々思っていました。今回のアンケートの結果を見ていて、これまでTCPトリビンスプランで取り組んできた環境整備というのが、間違いではなかったし、すごく評価を得ているというのは、本当にありがたい話だと思っています。これは他の市町にも話を聞いても、比較にならないぐらい環境はいい中で子供たちは学習できていると私も思っています。しかし、問題は学力の話だと思うのです。私が10年教育委員をやってきて思うのは、小学校で県平均を超えているのですが、中学に行って同じ学年の子が成績を落とすというと、問題の核心は、中学校にあるのだろうと思っています。その問題がどこにあるのかというのは、専門家の先生なりに聞かないと

分からないことなのですが、町長がおっしゃる読解力というのは、これから力を入れるべきところだと思っていて。パソコンを使った教育を当たり前のよう
にやっていて、本当にすごく進んでいる取組なのですが、読解力を求める大学
入試もそうになってきて、新しい高校の指導要領になって、初めて受けるのが再
来年の3年生、今の高校1年生が受けるのですが。この間提示された問題では、
読解力。数学でも読解力。何でも読解力が必要な問題が出されていて。問題を
読めなければ、いくら難しい数式を知っていても解けないというようなところ
に課題を持っていると、課題が出てくると。そういうのを乗り越えていくこと
が求められていると。読解力を付けるというのは、昔は読み書きそろばんと言
いましたけど、最も重要なことだと。重要性が増している。それとICTを使
ってというのは、直接リンクしているのかが見えないところで。読書の数字も
今回出ていますが、ものを読むという行為にこだわって取り組むことを中学で
できたら、具体的な数字が変わってくるのかなと。これは専門家の先生に聞か
ないと分からないのですが、取り組んでもらいたいなと思っています。

○増田委員

やはり読解力がキーワードだと私も思っていて。環境はしっかり整ったと。
あとは本当に中身だと。中身というのは、授業の内容と家庭学習だと思ってい
ます。授業については、いろいろな授業を参観させていただいているのですが、
僕は読解力とICTというか、タブレットを使った学習はすごく親和性がある
と思っていまして。授業のやり方ですね。この前見た授業では、本当に本を
読むのではなくて、先生がテーマを挙げて、そのテーマに関連するものを、教
科書やネットから自分で生徒が拾ってくると。それをタブレットの中にそれぞ
れが調べたものを挙げていくと。それを皆さんが見られるわけですね。その中
で皆さんが共有して行って、どれがそれに当てはまるかを集約していく。分析
とかそういうことですね。それで皆さんで議論をして、洗練させて行って、そ
れぞれが結論を自分で挙げ、それを皆さんが共有できる。これが読解力にす
ごくつながっていくと思っていまして。それがまだICTというハードでは、文
房具はできたのですが、その授業にまではまだ達していないというか、まだ途
上ではないかと思っているので、僕は非常にその辺を期待しています。だから
まだ入口ではないかと僕は思っていて、そのやり方によってグッと上がると
思っています。

あとは、家庭学習が非常に大事だと思っていまして。最近、何か以前よりも
宿題を出さないような傾向にあるようなのです。私は一定の反復するものにつ
いては、宿題は非常に効果的だと思っていますし。それと学校の授業で学んだ
ことを定着させる行為として、宿題は大事だと思いますので。家庭学習につい

てどうすべきかというのを、もう少し御検討をいただいて、効果的な家庭学習を出してもらった方がいいと思っています。例えば、学校の授業で、最近授業が始まると、今日はこの授業の中で何をしますと、目当てを出して、それで最終的に何を得たかを各自が考えるわけですが。それをやって、その日の夜に家に帰って、今日の授業はどんなことがあったのかなともう一度考える。それによって定着するのですね。そういうことを繰り返すと読解力も上がるし、学力が上がっていくのではないかと常々思っています。

○中村委員

自分は読解力を付ける、私は専攻が国語なので、余計にそう思うのですが、ただ、読解力というのは、例えば文字を読むだけじゃなくて、ICTを使った場合だと、例えば写真だとか、グラフだとか、そういったものも含めて要するに教師から与えられた課題について、あるいは自分が調べたいことについて、今授業を見る中で育ちつつあるのではないかと考えています。そういったことを意図して先生方もやっている授業を、吉田町の中で何度も見えています。結果はと言われると、私もよく分からないのですが、それに取り組もうとしていることは確かだと思うし。この間も佐藤先生も、授業の中で教えられる内容じゃなくて、先生方が能力、例えば比べるだとか類推するだとか、そういった見方、考え方を育てるような授業をやり始めているというようなことも指摘し、また先生方もそれを聞いて、そういった方向に行きつつあるのではないかとというようなものは実感をしているところです。

ただ、やはりまだまだそういった面では、もうちょっと踏み込んでやっていく必要があるのではないかとというような方向は揃っていると思います。最近、教育長がよく方向性を揃えてと言いますが、そういうような方向は揃っているのだけれども、まだもうちょっと、もう1歩の踏み込みというのがね。もう既にある程度やれている人とやれていない人というのがいるかなとは思っています。そういったところで、それであれば、ちょっとずつ上がっていくのではないかとというようなことを思うのですが。校長をやった経験からすると、そこら辺は全部上げるというのは、人を育てるといってはなかなか一朝一夕には行かないので、子供を育てるのは大変ですけど、教師を育てるのもやはり手間がかかる話だなと思うので、そういったところでは、環境が良くなったから、すぐに人が変わるかということ、そうはいかない気がします。でも着実に良く上がってきているというのは実感としてあります。

○塚本委員

私が思うのはここ10年で、全部の学校の順位を出したら、ほとんど変わっ

ていないのではないかと思うのです。同じことを同じようにみんな努力しているので、それでは順位も変わらないし。いつも大体同じところですよ、吉田町としては。すると、特別なことをしない限りは超えていけない、乗り越えられないと思うのですね。今中村委員がおっしゃったグラフの読み取りとか、新しい指導要領になって、ICTになって端末が入ってきて、今やっている読み取りとか調べ学習も含めてなのですが、前の指導要領の時に、ICTがなくてもやるべきことはあって。同じことをやっていて、今は形ができただけで、同じことを今求められているものやっていると。前も今も変わらないとするならば、問題はそこではなくて、別なところにあるのではないかと思うのですね。だから、特別な取組はしているようで、皆がしていることと同じレベルのことしかしていない気がするのですよ。

だから、ここは一つそれを乗り越えた新しい取組をしない限りは、今ある位置からは上れないのではないかという気がします。同じことを新しいことをやっているようでいて、みんなやっていることを乗り越えた取組は、実はないのではないかなという気がします。

○中村委員

そこら辺が難しいところで、方向はいいのだけど、私も思っているのは、そのもう1歩のところを踏み込めていないというのは、そのあたりだと思うんですよ。特別なことというか。多分先生方もグラフの読み取りが大事だというのは、分かってはいると思うのですよ。そこら辺がきちんとやれる人と、割合まあいいやでやることもあって、その違いが結構大きいというか。この間も夏休みの先生のお話も聞いていたのですが、その先生も学習問題をきちんと出しましょうという話があったのですが、学習問題が曖昧だと、子供たちの主体性があまりできない。私も校長をやっている時に、まさに同じことを言ったんだけど、もっと具体的な課題を出さなきゃ駄目だというふうに言っているのだけれども、教えればある程度変わっていくのだけれども、分かってはいるけれどもなかなかできないというところがあって。そこら辺だと思うのですよね。方向性としては間違っていないと思うのだけれど、そのもう1歩大事なところがつかめている人とつかめていない人の差が出てきて、そこら辺がうまく学力に結び付かないような気がしてならないのですが。

○田村町長

全国学力・学習状況調査が、今はかなりじっくり文章を読んで、その文章が何を語っているのか。それが分からないと答えが出ないのですね。その時に一番大事なことは、文章を読めない人間が増えているのではないか。例えば、あ

る問題があつて、その問題で平均点がとれないというと、結果そういうことですよ。そうすると、いわゆるその問題を読めない生徒がうちの町は多いということでしょう。まず最初の文章を読めないのです。字面は追うのでしようけれども、何が書いてあるかが読めない。それが読めないから問題の答えができない。決定的な結果ですよ。だから先生方が子供たちに問題を出した時に、どんなふうにこの文章を、まずこの文章を読ませてですね、そこに何が書いてあるのか少なくとも理解させないと、基本的にはいくらやっても字面を追うだけ。だから、ICTがあろうがなかろうが、基本的には関係ないのですね。だから、読めないというのは、先生に責任を負わせるというわけではないのですけれども、先生がその文章について何が書いてあるのか徹底して子供に読み解かせるという、そういう教育をしていないのではないかと、先生はどのような教育をしているのだらうって思うのですけど。結果とすればそういうことですよ。新井紀子さんの本を読むと、本当に読めない子供がいっぱいいるのですよね。本当に文章が読めない。文章を読ませるといふ基本的なことをどうすれば、どのような教育をすれば文章を読めるようになるのかということだと思ふのですけどね。

○増田委員

読めるということは、もちろんただ読んでいくだけではなくて、何を伝えたいのかということを理解するという。

○田村町長

増田委員は仕事で分かっていると思いますが、法律の条文というのは、本当に普通の人を読んでも分かりませんよね。本当にじつと読んで、何が書いてあるかを理解すると。そうしないと法律の条文は分からない。

○増田委員

私は、この前のICTの授業で素晴らしいなと思ったのです。ただ読むのではなくて、その本のどういう見方をすれば、この数字が引っ張ってこられるとか、そういう教え方を先生がされていたので。国語ではなかったのですが、社会とかの授業でも、読解力は伸ばせるし、もちろん読解力は必要だし、そういういろいろな授業を通して読解力って引き伸ばせるのかなというのを、授業を聞いていて思ったのですね。

○田村町長

そこなのですけれども、確かな学力を保障する環境づくりはできているけれ

ども、結果が伴わないと、ではどういう教育をやっているのだとなってしまう
ませんか。そこに行ってしまうような気がしてしょうがないのですけれども。

○北澤委員

授業改善を意識してくださる先生も中にはいらっしゃって、すごく研究熱心
な先生もいて。視察などで行かせていただいた授業を見ていると、やはり子供
が興味を持つ授業をされている、そういう形を持たせていると。すごく子供が
これを知りたいと、これをやってみたいと思わせるような、そういう題材等を
先生が本当に研究して持ってきていると思うのですよね。そういった授業は、
外から見ていても子供たちが本当に生き生きと、それこそ自分で調べようとす
る、読み解こうとするという姿勢が見られて、見ているとすごくいい授業をさ
れているのが分かりやすかったりするのですが。やはり、それが見られている
時だけかもしれないのですが、通常の授業の時にも、子供たちがこの課題に向
き合える、この授業の時間内にしっかり向き合える環境づくりが、ICTなり
何なり道具はありますけど、そういったものに集中させるその力というのは、
やはりリードしてくださる先生によるのかなというのを感じました。特に中学
校になるとは、やはり課題が難しくなる分、子供たちも少し難しいものになっ
ていくと、探究したくなる子はいるけど、ちょっと難しくなるということもあ
ると思うのですが。そういう子たちをいかに、この問題を解いたらなにがある
のか、それこそテスト自体を頑張るということ自体が、自分にとって何になる
のかなっていうことを、しっかりと目標を定めてあげられるようなことをして
いただけると。家庭の問題もあるのですが、子供のやる気があるかないかとい
うのもすごく関わってきて、親としては。頑張ろうと思っている子に対しては、
本当に親はサポートをしようとするし、何もやらないという子に対しては親も
お手上げみたいな。やはり目標をしっかり持たせてもらいたいなど、学力に関
しては学校で。それとは別に、子供たちが夢を持ったり、いろいろな自分の将
来のことを考えてというので、自分で頑張りたいところという目標は、それは
また違うものだと思うので、まずは学力をしっかり付けさせる、目標をしま
り学校が定めてもらえると、まさにそこがスタートラインだよと、その先が
ちゃんとつながっていくというのを見せてもらえると、やっぱり子供たちも目
標ができて、課題への取組も違うのかなと。

そして、家庭学習がすごく大事だというのは、本当に分かるのですが、子供
たちをいかにやる気にさせるかというのは、家庭の中でも頑張っている家庭は
たくさんあると思うのです。本当に子供のやる気次第。子供がちゃんとそれ
に向かっているのかという次第になると思うので。一つ学校の学習と、もとも
とのやる気というのは、また別物なのかなというのを、最近感じるようになって。

うちの子も、小中は出された課題はやるのですが、ただやるだけ。中身をしっかりと見ないで、埋めるだけという課題の仕方、なかなか成績が伸びない。でもやっぱり今は高校生になって、自分の目標ができた時にグーンと伸びる時は伸びるのが見えているので、そういったところの子供のある一定の、今この授業で皆に付けさせたい学力を、先生たちがしっかり子供たちに分かるように定めてほしい。そういった授業をやってほしいというのはあって。あとは課題を出すについても、ただ出すと言われても、子供はただやるだけなので。やって何があるのというところがあるので、そこを今の子どもたちは分かると思うのですね、しっかり教えてもらえれば。そういったものをしっかりと示していただきたいなというのを、少し授業を見ながら感じる部分もあるので。学校と家庭、それぞれ一緒になって子供を支えていくというのはあるのですが、それぞれの役目とかはちょっと違う部分もあるので。そういったものをしっかりと学校は学校のそういったものをしっかり持たせてもらいたいなと、親としてはそういうのが出てくるところがありますね。

○田村町長

そうすると、全国学調で県平均を上回ってくる学校の先生と吉田町の中学校の先生と教え方が違うということでしょうか。本当のことを言うと、それぞれの市町の成績を出してくれれば一発で分かるのだけれども。先生方はそれをやると競争が激しくなって駄目だろうと言って。本当はやってもいいのだと思うけれども。なぜうちは現実と結果がリンクしないのか。リンクしているところは、一体何をやっているのかと。反対に学調の県平均を上回っている学校とか町は、どういう教育をやっているのかと知りたくなりますよね。

○増田委員

児童・生徒の習慣ですよね。生活の習慣の違いじゃないですか。

○塚本委員

そうですね。読解力の話になると、自分も何も言えないのですが。できないので言えないのですが。小さい頃からの習慣みたいな。それは家庭環境みたいな話になるのかなという気がするのですが。未就学児の時に読み聞かせをしてあげたかどうかとか。小学校低学年の時に図書館とかそういうところで読書の回数がどうだとか。単純に私はそう思いますけど。

○田村町長

そうすると、スタートを切る時点が早いか遅いかによって変わってくると。

○塚本委員

それが習慣化されている秋田県とか、多い課題が提供されていますよね、家庭学習が。家庭学習の習慣化がされている。

○田村町長

そうすると、うちの町は、ずっと県平均を上回ることはありませんよね。

○塚本委員

そういう意味では、今回視察に私たち教育委員だけじゃなくて、春日井に行ったのは、各学校の研修を担当されている先生も一緒に行って一緒に見ていると。先生の先進的な取組をしているところに研修に行って、町の先生たち、小学校、中学校の研修を担当している先生が意識を高めるという。子供たちのために学力を高める改善をしなければならぬという意識を高める、それが共有できたというのは、ものすごくいい取組だったと思っています。なので、テクニックよりもモチベーションというか、吉田町の子供たちの学力を、ちゃんと確かな学力を付けさせるという意識付けというか、共有するという行為をしていくことで、授業が良くなっていくのではないかと考えているので。一つの柱としては、そういう今回のような教員も一緒に町を挙げて意識を共有する。もう一つは家庭学習、保護者に対して地域の皆さんにも協力を、一緒に子供たちを育てていきたいと思いますという、その二つのことができることじゃないかなと思うのですね。やればどうなると言うよりも、できることだと思います。

○田村町長

塚本委員が最初におっしゃられた、小学校ではいいのだけど、中学校になると下がってしまう。中学校の教育に、根本的にどこか欠陥があるのではないかと、そういうふうに聞こえるのですよね。

○塚本委員

私はそう思わざるを得ない、数字を見るとですよね。それは中学校の、私は何年も指導主事の先生なり、学校の先生と話した時に、その話はずっとさせてもらっているのですが、先生たちがおっしゃるのは、中学校と小学校では仕組みが違うというか、教科担任制で、小学校の場合は1人のクラス担任の先生が全教科を見て、子供たちのいろいろな学力の進行度合いとか、生活習慣みたいなものを把握しながら、適正な教育を提供していく。それがみんな同じなので、チーム化もされやすい。中学は教科担任制なので、私は英語しか教えていませ

んよと。私は数学しか教えていませんよと。その良さはもちろんあるのですが、どうしてもチームで子供たちを見取っていくことがしにくい環境かなと。でも、それは吉田だけの問題じゃなくて、全国津々浦々、中学校は皆そうやっているわけなので、理由にならないだろうというところなのですよ、それでも学力が付いているところはあるので。

そうすると、チームとして子供たちを見ていくというのは、吉田町の場合、中学校1校で、大きい中学なので、教員たちも多いチームなので、そのチームの意識を統一して、バーッと行きにくいというのは環境としてあるのかなという気がしますけど。

○山田教育長

中村委員は、まだ委員になって1年ぐらいですけど、他の委員は2期目に入っているんで、4年ぐらい学校を見ているじゃないですか。4年以上学校を見ていて、学校の授業そのものというのが、変わってきているなど感じているのか、それとも相変わらず変わっていないのか。その辺ってどうなのですかね。

○塚本委員

変わっています。

○山田教育長

それは良くなっているのですか。

○塚本委員

すごく良くなっていると思います。ただ、さっき言ったように、比較対象がないので、過去の学校であったことよりも良くなっていると思います。もしかしたら、他の地区はもっと良くなっているかもしれないということが、結果としてこの成績に出ているのではないかという評価なのですね、私は。

○山田教育長

それは、小学校も中学校もですか。

○塚本委員

中学校は、残念ながらあまり感じないです。良くなっているけれど、小学校ほど良くなっているという印象は受けていないということですね。小学校がものすごく良くなっているという印象が私はあります。10年見ていて、小学校はものすごく変わってきている。

○増田委員

変わっていると思うのですが、まだ無駄が多いというか。家庭学習なんて、それもタブレットでやらなきゃいけないっていうか、使い方が分かっていないというか。変わってはいるのですが、もうちょっとこうしたらいいのになんて、私でも思う時があるのですがね。

○山田教育長

変わっている印象というのはね、教員の指導が変わっている変わっていないという視点と、子供の学びが変わっている変わっていないという視点が両方あると思うのです。子供の学びが変わっていれば、多分教員の指導も変わって、連動している可能性が高いですよ。

○増田委員

先生の意識は明らかに変わっていると思います。

○山田教育長

実は、何を言おうとしたかという、この前視察研修で春日井に行った時に、春日井の校長先生がしきりと言っていたのが、人間関係づくりなのだ、要は学びの集団づくりなのだということだったと思うんですけど。子供たちがその気にならなかつたら、やっぱりやらされている学習だとなかなか伸びていかない可能性が高いかなと自分は印象として思ったのですけどね。教育基本法が変わって、学力が定義付けされたじゃないですか。3要素みたいな形で。基礎的・基本的な知識や技能と、そういうのを活用した思考力や判断力や表現力。そして、もう一つ言われているのが、主体的に学習に取り組む態度というのが、学力の3要素の中の一つに入っているのです。多分皆さんが学校訪問をした時に、教室へパッと入った時に、何となくその集団というのが学んでいるなって感じる集団と、何をやっているんだろうって感じる集団とってというのは、授業ごとにあるのではないかと思うのですが。子供たちがすごく真剣になって学び合っているなという印象を受けるところの授業は、やはり見ていて教師もしゃべりすぎていないし、子供たち自身がやろうとしているというような、そういう集団になっているような気がするのですね。

なので、中央小に行った時に、6年生などはすごく高め合うような集団になっているなということを感じたりしたのですが。そうした集団づくりができているところでの授業というのは、すごく見ても面白い。子供たちも真剣になってやっている。ああいう授業をやっていけば、きっと力というものは付い

てくるのではないかなと思ったのですが、皆さんは授業を見た感想などでもいいですが、どう感じましたか。

○北澤委員

小学校は、取り入れるのが早いなという印象がありました。ICTもそうなのですが、先生たちも取り入れたいという姿勢を、完全にこうやっていくのが、ああ、この先生はここまでやっているのかと。でも、やはりできていない先生もいらっしやる。そういうのは、学校内で共有がまだ足りないのかなという学校もあったりして。本当に中央小学校などは、地域の皆さんに入ってもらっての授業を、すごく活発にされていて。先生が言うのではなくて、子供たち発信で、子供たちがやってみたいという発言があってというので、そこからまたそれが先生を動かして、地域の人を動かしてというのが、年々大きくなっているというので、子供たちがすごく自信があるような、自分たちが授業を回していますみたいな、そういった授業を見せてもらったのがすごく印象的で。

中学校の方は、本当に落ち着いた授業ができるようになったという印象が最初で。うちの子が入った時は、既に落ち着いていたのですが、その前の話とかも聞く中で、いや、今の子は落ち着いて、それこそ授業が成り立っているところから入って。ベテランの先生からしてみると、子供たちのクラスごとの雰囲気を見ての、このクラスだからこそ、この先生はあえてグループワークをやらせてみたり、あえて先生がグルグル回って、一人ずつの横に寄り添って、見たりという、授業としては前で先生はやっていないのですが、そういったクラスの子を見ての授業をされている先生もいらっしやって。吉田中学校も落ち着いて、あんなにいっぱいクラスがある中で、静かに廊下とかでギャーギャー騒ぐ子もない中で、しっかりとそのクラスごとのちゃんとした授業が成り立っていて。うちの子が入った時もそうなのですが、授業参観に行くと、各クラスで違うのですよね、雰囲気が全然。教科が違うことなのでしょうけど、一番隅のクラスがすごい真剣に数学の授業をされていて。何だか分からないけど、ピーンとした空気の中、何もしないわけじゃなくて、すごく子供たちが何かやっているんですよね。このクラスすごいみたいな。特進クラスみたいっていう印象があったりとか。教科担任制というものもあると思うのですが、その先生の特徴でクラスの色も出ているというのが中学校なので、クラスごとの雰囲気がすごくあって。

それでもただ本当に残念なのは、やる気がない先生ってすごく分かりやすくて。やる気がないのか、外から言われたくないという印象があるのか。この先生はそういう先生だなっていうのが、分かるような授業や態度があるので、そういうのが吉中に関しては、多分学校内でも上手く先生たちとのコミュニケー

ションが取れていないのかなってというのが、トリビンスプランの提案をした時も、アンケートをした時にも感じる部分があって、すごく残念だなと思っているのですが。今年はまだちょっと行っていないのですが。でも、先生として研修されている姿を見て、先生たちが少しでもやる気を出して研修に臨まれている姿を、最近すごく見るので、ああ、変わっているのかなと。この先生、やる気があるのかなっていうものも見られるので、そういったものはすごく変化を感じるというか、姿勢が変わってきたのかなと。小学校の姿を見て、ああこれではまずいと思った先生たちもいるのかなという印象は受けているので。少し変わってきているのかなと。いい影響を小学校から受けているのかなというのを感じています。

○山田教育長

冒頭にお話のあった教育環境、いわゆる物的な環境づくりというのが、人的、物的な環境づくりというのが、吉田町は他市町から比べるとうらやましいぐらい整備されてきているという、そういうハード的な部分と、今話したようなどちらかというソフト的な部分で、指導力であったり、学ぶ力であったり、読解力も含め、そういうようなところをどう力を付けていくのかなのですが。去年、今年と、一生懸命学校教育課の方で取り組んでいることというのが、研修に力を入れているというところで、ICTは入ったけれども、それをどう活用していくのかとか、子供の学びにどうつなげていくのかということ、学校と関わろうとした時に、指導主事が学校へ訪問する機会というのが、自分が来た1年目よりも、去年、今年の方が確実に増えているのです。

そして、ICTを有効に使えるようにということで、チャット機能を使って研修主任の悩みを指導主事が聞いたりということをやったり、それが全ての教員とチャット機能でつながっているの、こんなことを知りたいとか、こんな悩みがあるということ、共有しながらやりとりができる。1年目から3年目ぐらいの若手の人たちの授業力の支援をするということで、そこにターゲットを絞って、年2回ぐらいずつ指導主事が行ったりというところもあったりして、今年は佐藤先生をどの学校にも入れてということをやったり。研修にちょっと力を入れながら、授業を変えていこうというようなことで取り組んでいるところがあるのですが。行政の方で何ができるのかなという時に、そういう物的、人的なところで予算も取りながら整備をするという部分と、あとはソフト面で指導力向上のためにどういうふうに力を付けていくかということとを、両方とも維持、向上させていくという取組をしていくことが大事だと思っているのですが。そういう意味で委員の皆さんからも、もっとこうした方がいいのではないかという意見があれば、聞かせていただきたいし、この場でなくてもいつ

でも言ってくれればなと思っていますところす。

○増田委員

この話の中で改めて思ったのですが、やはり主体的に子供が取り組む環境づくりが非常に大事だと思っています。今日のこの資料の吉田探究。これは素晴らしいアイテムではないかと思っています。特に、小学校5年生の防災の方を見ていつも思うのですが、非常にレベルの高い、児童が取り組んでそれぞれが調べて結論を出して発表をしていると。これをもっと生かす、子供たちが学んだことを発表できる場があると、子供らのやる気にもつながっていくのではないかと思うものですから。吉田探究をもう少し町民の人にも知ってもらって、子供たちも発表する喜びというか、そういったものにつながっていくと、子供たちのやる気向上にもつながるのではないかと常々思っています。

○中村委員

先ほど教育長が言った研修の方に力を入れているということですが、あまり具体的にこの場でこうしてくださいみたいなことは、言うべきものでもないだろうと思うのですね、読解力でこうしてくださいとか。私は専攻が国語なので、読解力を上げるためには、やはり要約するのが一番いいと個人的には思っているのですが。新聞記事とか要約するのが一番いいと思っているのですが。それをやってくださいというのも筋違いというか、ちょっと場が違うかなと思っています。行政としてということを考えてみると、そういった研修を、方向性を、先生方の足並みを揃えていくとか、そういうようなことでやっていくと。例えば、ICTだったらICTをやる。佐藤先生が今回全校に行くというお話だったのだけれども、佐藤先生はコンピテンシーというので、子供たちの学力というよりは、考える力だとか、思考力だとか、見方、考え方をそれぞれ磨くということ、全校に触れ回ってくれていると。それが内容ベースでやってきた人たちが、違うよということ、常々言われていて。教育長がフォローとして、方向性を揃えてねというふうに言っているというような姿勢というのは重要かなと思います。

というのと、読解力であるならば、先生はどうやって教えたらいいか分からないとか、そんなことが書いてあったので。テストは作れるけど、教え方は分かるけどみたいなことを書いてあったと思うのですが。そういった面で必要な人たちが、力を入れている人たちが、研究している人たちを呼んでやると。それも数年単位でやっていくということが大事になってくるのかなと思います。特にICTがあって、ICT流れでコンピテンシーというのをやっているの、そのところをまずは定着していく必要があるのではないかと思います。

○山田教育長

読解力が大事だというのは自分も同感で、高めなければいけないとは思いますが。読めば読解力が付くのかというと、読まないよりは読んだ方が読解力が付くとは思いますが、今年吉田町の学校で共通して認識しているのは、コミュニケーション力を高めようという話をして、どこの学校でも意識して取り組んでいるのですが。例えば人とやりとりをする中でも、相手が何を言おうとしているのかということのを、自分の中で咀嚼して自分の考えを言うことも、一つの読解力につながると思うのですね。読んでいるわけではないですが、相手は何を言おうとしているかを読み取る。いろいろなコミュニケーションを取っている中でも、そういう読解力みたいなものは付いていくのだろうと自分は思っています。そうすると授業の中で、インプットする部分とそれからアウトプットする部分というのがあった時に、相手が何を言おうとしているのか。知識理解としてどういうふうに自分が修めるのか。そのことをどうやって発信をして相手に理解してもらおうかということも、一つの読解力につながるのでないかと。そういう授業をやっていくことが、読むことと並行して力が付いていくと思っています。そうした意味で、コミュニケーション力を高めようとやっていると、上手くそうした力につながっていくといいなと期待はしているところなのですけどね。

○塚本委員

その話なのですが、読解力の話はかなり広く捉えている話で。この間研修の時にもあったし、よくICTの話でも出てくるのですが、私は読解力とは、広義に捉えれば、相手がどう思っているのか読み取るのも読解力かもしれないけれども、実は付けたい力というのは、この問題を読んで何を言おうとしているか、この文字から読み取って理解して、アウトプットするという。この文字から読み取るという行為だと思うんですね。テストはその環境に行って、問題が出るわけじゃなくて、紙に書いてある言葉を目で追って読み取って、内容を理解して答えるというのがテストの形で。読解力がある人がうらやましいのは、例えば、本を読んでいる人は、すごく考えが、思慮深い。いろいろな知識があったり考えが深いので、答える内容もものすごく深い内容で答えてくる。新聞を毎日読んでいる人と毎日読んでいない人とでは、情報量が全然違うとか。活字を追って情報を入れて読み取っているという行為と、人と話をしたりコミュニケーションをして付いてくる読解力というのは違うというか、活字を見て読み取っていく力を付けることを意識してやらないと、グラフを読み取るとか、映像から以下の問題でこの動物はパッと見てトラだと分かるのと、文章から読

み取ってトラというのを意識するのと、両方の力が必要で。今は便利になって、映像から読み取る方が重要で、その後考えることが重要だからと、映像から読み取らせるといふ簡単な方に行くのだけど。実はICTの罨みたいなところがあって、本当はこの文章から読み取って、これがトラだと分かる。黄色くて縞があって、ひげがあつてみたいなことが書いてあつて、それがトラだといふのと、トラの写真を見てトラといふのとでは、読解力が違ふと思ふんですよ。なので、今求められているのは、活字から読み取る力が足りない気がしています。

○田村町長

読み取る力について、全国学調の試験問題で、ちゃんと答えた人と間違つた人がいますよね。間違つた人は文章を読んで、おそらく読み解いていないと思ふんですよ。全国学調の試験問題は、取り出そうと思えば、すぐ取り出せるのですか。

○山田教育長

問題は、公表されていますから、紙ベースでもあります。

○田村町長

間違えたか、正しかったかは分かりますか。

○山田教育長

それは学校が全部掴んでいます。

○田村町長

正しいと判断した人は、どこをちゃんと読んで、何を求めているか分かつたからやつたのか。間違つた人は文章を読んで、何を問うているのか分かつたからといふのを、一人一人で作らせたらどうですかね。そうすれば、なぜ自分が間違えたのか分かりますよね。文章をそもそも読めなかつたんですよ。あなたはこういう文章を読んで、読み解けなかつたのですよね。はっきりと分かりますよね。そういう大事なことを教えてやつたらどうですかね。その方が分かりやすいじゃないですか。私にはそう思えてしょうがないのですけれどもね。

それと、あの例の頭のいい人と読書習慣がといふのは、因果関係じゃないですよ、相関関係ですね、頭のいい人は本を読むといふのは、因果関係でいふと、問題をなぜ間違えたのだらうと、先生は教えているんですよ、それ。あなたはこれを読んだ時、何を問うていると思つたのですかと。あなたの読み方

でここが間違っていたのですよと。そういうふうにした方が分かりやすいですよ。具体的に問題でやらせた方が。

○塚本委員

そうですね。何となくテクニク的な話で、熟度が、そういう高校入試とか大学入試とか、徹底的にそういうところの読み取り方、テクニク的な話になるので。

○田村町長

新聞でも何でもですが、記事は読んでそれに何が書いてあるか分からなければ。基本的に活字なんですよ。だから、そこで子供たちに学ぶ動機付けを先生がどういうふうにして付けるかですよ。それと勉強の仕方を教えてやったらどうなんですかね。ノートの取り方とかね。先生はそういうのを教えるんですかね。

○中村委員

教えていると思います。そういう、例えば比べるだとか、分類するとか。そういう考え方とか思考の仕方というのは、思考ツールのようなものを使って、そういうものを導入しながら授業を進めていこうというふうにいる人は増えていきますね。そういう意味では考え方というのを教える人たちは、前に比べれば多くなっていると思います。

ノートのまとめ方なんかも、先生にもよりますけど、学級に掲示したりだとかしてまとめたりだとか。自分の前の学校では、研修部が昇降口にいいノートの取り方みたいなのは出ししたりしたことがあって。ただ、今はICTで、ノートを取らない先生も結構いるので。ICTをどう上手く使って、要するにまとめればいいわけで、ノートかICTかは別として、自分が何を学んだかまとめることが大事なので。あるいは、自分がどう考えてきたかという思考の流れを振り返ることが大事なので。それがノートなのかICTなのかはどちらでもいい話だと思うんですね。いずれにしてもそうやってまとめていくのですが、そのまとめというのが、上手ければ上手いほど、私は主体的に次の課題をまとめていく子になると思うのですが。

○田村町長

ある日教室に入っていくと、みんなが授業を受けているのですが、生徒を引きずり込む力を持っている先生と、先生大丈夫って思われる先生といますよね。本当に生徒を引きずり込む。この勉強をさせる、動機付けるといって、そこに触

れさせる先生というのは一朝一夕にできるわけじゃないでしょうけどね。

○北澤委員

ICTのおかげで、授業をやった後家でも振り返りができやすいと思うんですよ。授業内容の。課題も、先生がもう少しやりたい人は家で打ち込んできていいよということができ、課題を持って帰って家でタブレットを開いてやっている姿とか見ていると、今日の授業はどうだったんだろうと、子供が自分から、あの授業をもうちょっとやりたいと思った時に、タブレットがあるだけですごくここがいいところなのかなと、すごくICT教育の中でいいなと思って。これから先、課題も、本当に子供たちがもう少し解いてみたいとか、同じような問題をもう少しやってみたいと思わせてもらえる問題があると、保護者もそのテキストがあるといいなみたいな、そういったもので。逆にやったからこそ評価されたいと、子供たちは思うと思うのですね。頑張ったところをやっぱり見てもらいたい。親なり先生なり。多分学校から出た課題というのは、先生に評価されたい。ここまで頑張ってきたという。まだ中学校の先生は、多忙感があると思うのですね。部活動もあって、小学校よりも。やっぱり課題と言ってもやったかどうかをパッと見るだけで終わっているのも仕方がないなと感じているのですが。もう少し中学校もこれから少しずつ部活動に関しても変わっていくと思うので、ICTがもっと先生たちも自分の手となり、簡単なツールとして使いこなせるようになった時に、子供たちにコミュニケーションがうまく取れるものにしていただきたいなと。生徒と先生のコミュニケーションが取れていないと、授業も成り立たないし、子供たちのやる気にもつながらないと思うので、学校教育の中では、そういったコミュニケーションをしっかりと取って子供たちを見ていただきたいなというのがあるので。いいものが目の前にあるので、上手く活用していただきたいと思いますね。情報も上手く使っていると、すごく助かるのではないかと思います。

○増田委員

北澤委員のお子さんは、お家でタブレットを何度も開くと思うのですが、家でタブレットに触れる瞬間は、あまり徹底されていないというか、あまり開く人が多くないのではないかと思います。このアンケートの中でも、子供たちが重いタブレットを持ってきて、何も家で使わないで、そのまま学校に持っていくという意見が散見されたものですから、家でのタブレットの使い方というか、先生が家で考えられるようなテーマをあげてもらって、家でそれについて考えるような習慣付けができるといいのではないかと思います。

○田村町長

いろいろな意見が出ましたけれども、もう一つの課題があるのですが。今やっているTCPトリビンスプランの中で、子供の学力向上について、これだけではどうしても言いたいということはありませんか。

○塚本委員

私は、エアコンとかトイレとかというのに、ものすごく大きな予算を使っていただいて環境が整えられ、一段落して、いよいよ教育がどこにこれから進んでいくかといった時に、やっぱりこれまでも支援してくださいました人的支援の充実をお願いしたいと。そういう意味では、先ほどの話が出ている指導主事が学校にたくさん行ってきていて、先生たちのコミュニケーションが密になってきて、吉田町の先生たちのチームとしての子供に対しての教育力が高まりつつある現状なので、ぜひそれを引っ張っていってくださっている指導主事の充実をお願いできたらなと思います。

○中村委員

特に外国語の子供たちが、授業中に上手く動けていないというか、そういうことがあって。実は前の学校は、1割外国人の子供たちでした。なので、PTA総会がある時も、その外国人の保護者だけ集まってもらって、通訳を入れて、例えば旗当番にちゃんと出てねとか、そういうようなことをきちんと言わないと、連れていってもらえるものだと思っていたりとかするので。そういったPTA活動は、こういうことをやっているから協力してねとか、資源回収もあるよとかを通訳を介して言ったりとか。あとは、今度就学時健診がありますが、これも保護者にちゃんと通訳をあてがってみたいなことをやるとスムーズに行くなど。保護者間、日本人と外国人とのトラブルがすごく減るといえるのか、そういうことがあると思うので、そういった外国人の子供たちへの支援人材を確保していただけると。その子たちも今後将来日本に残るか、地元に戻るか分からないですが、少なくとも日本に住むようになったら、それぐらいは日本語の力を付けていかないといけないかなと思うので。そうした意味でもそういった形の支援につなげていってほしいなと思います。ちなみに1割いた時は、支援員が多い時で3人いました。あとは、通知表の翻訳だけをやってくれるとか。そういう人がいたのでありがたかったかなと思っています。

○増田委員

ぜひ電子黒板をどのクラスにも最終的に導入していただきたいと思います。本当にそれ使うのかなと思ったのですが、教師にうかがうと非常に使いやすい

ようで、書き込みができたり、そのデータを保存できたりするそうなんです。非常に学習の効率化に役立つと思いますので、ぜひ今後御検討をいただければと思います。

○田村町長

予算は付けてあります。

○山田教育長

実は、今大型のテレビを含めて全クラスに入っていて、中学校は全クラスに電子黒板が入りました。ただ小学校は、一部には電子黒板ではない大型のテレビだけというクラスがいくつかありますので。まだ全クラス電子黒板ではないのです。

○田村町長

新しく書画カメラを入れてくれという話があったよね。うちの町と長泉町は、教育環境の整備に予算を入れ続けているのだよね。あとは指導主事などもちゃんと入れてますし。うちはちゃんとしていますから、あとは結果を出してもらいたい、そこなんです。長い目で見ろと言っても、何年見ればいいのですかという話で。そういうふうなことなんですけどね。先生方の環境を充実することは、当然明日を背負う子供たちのためなわけですから、できる限り整備をしますよね、うちの町は、トップクラスですから、その辺は。あとは、先生方が今度は子供たちにどうモチベーションを与えてくれるかでしょうか。結果として学力につながっていくと。私はなぜ結果を重視するかというと、頭一つ飛び出すというのは、より高みに行くということは、その子はより広い世界が見えるんですよ。そういうことなんです。より高みに行ける子は、より高く、高くなるといういろいろなものが見えますから。そういうところをぜひとも育てていただきたいと思うんですけどね。

○山田教育長

結果を見てくださいたいのですが。授業は、確実に変わってきています。なので、先ほど言った子供が学びに向かう姿勢づくりと、教員の指導力、教育課題設定をするかも含めて、その辺を充実させていくことで、子供の力を授業でアップしていくし、全ての子供が同じ授業の中で同じ進度で進められるかということ、やっぱり理解度が全然違うので。そこが先ほど言った家庭学習をどう絡めていくのかとか、今教員補助で個別に中村委員にやってもらっていますが、個別にかかわっていくということをどう進めていくかというのが底上げ

としては大事なのだろうなど。この間も全国学調の統計資料を見ても、低位層の子供たちが結構いますから、そういう子たちが少しずつ上の方に上がっていくという手立てを取っていかないと、全体としては平均という意味では上に上がっていかないだろうと思いますので。ハードとソフト両面の充実。そのあたりをしっかりと図っていかねばと思います。

○田村町長

個別最適というのが、だんだん科学的には可能になってきているのだから、個別最適というノウハウを蓄積して、実際に実効性のあるシステムを作って、授業にいかすということですからね。そこに尽きるとは思います。

時間がだいぶたちますので、学力向上の話については、この辺りでと思いません。

(2) 部活動の地域移行について

○事務局

それでは、部活動の地域移行について説明をします。資料はNo.6からNo.8になります。まず、資料6を御覧ください。部活動の地域移行については、本年6月にスポーツ庁の方から運動・部活動に関する提言書。それから3枚目のところに、文化庁から、8月に文化部活動に関する提言書が出されまして、どちらも令和7年度を目途に休日の部活動から段階的に地域移行をしていくことを基本とする改革の方向性が示されました。本町についても、来年度からの3年間を部活動の地域移行に向けた改革集中期間として、学校教育課と生涯学習課と連携しながら、部活動の地域移行に関する協議会を立ち上げていくことを予定しています。本日は部活動の地域移行に関するアンケートを、小学校5、6年生の児童、それから中学校の全生徒、そしてその保護者並びに教職員に対してアンケートを行いましたので、その結果の報告をさせていただきます。委員の皆様にはこの結果を踏まえて、本町の地域移行に向けた課題について御協議いただければと思いますのでよろしくお願いたします。

それではアンケート結果について御覧いただきたいと思います。資料7-1がアンケート結果を集約したものです。資料7-2がアンケート結果を円グラフにしたもの。それから児童、生徒、保護者、教員から具体的に示された意見を掲載しているものとなります。このアンケートについては、本年10月5日から19日までの間で実施いたしまして、小学校5、6年生については、374人、中学校1年から3年については、379人の生徒、保護者については669人、それから小中学校の教職員については、102人から回答をいただき

ました。

最初に、小学生への質問で、「中学生になったら学校の部活動に入りたいと思いますか」、についてですが、入りたいが68.2%、地域クラブで活動したいよりも、学校の部活動への参加意思が多い結果となっています。次に、資料7-2、1ページに具体的な部活動が書いてありますが、ソフトテニスが一番多くて、美術部、バレー部と続いています。地域クラブに入りたい子について、どの活動をやりたいかということが、その次の2ページを御覧いただきますと、ダンスが一番多くて、その次にサッカーということで、これが突出して多い活動になっています。次に、小中学生に聞いている質問です。7-1ですが、「中学校に部活動がなくなり、地域での活動に移行した場合、地域での活動に参加したいと思いますか」について、小学生は、「参加したい」と「どちらかといえば参加したい」を合わせて62.0%、中学生については66.2%と、若干中学生の方が地域での活動に参加したい意欲が高いという結果となっています。

次に、「中学校に部活動がなくなり、地域での活動に移行した場合、地域での活動にどんなことを期待しますか」という質問に、小学生で1番割合が高いのが、「勝ち負けにこだわらない楽しい活動」2番目が「長く続けられる趣味的な活動」これに対して中学生で1番割合が高いのが、「競技力・技能の向上」2番目に「勝ち負けにこだわらない楽しい活動」となっています。保護者については、中学生と同様で、1番目が「競技力・技能の向上」2番目が「自分たちで考え決定しながら行う活動」となっています。

次に、2ページを御覧いただきたいと思います。「休日の部活動を学校から地域に移行することについてどう思いますか」については、「賛成」、「どちらかと言えば賛成」を合わせて教職員が88.4%。保護者が72.2%。中学生が57.3%といった結果が出ています。教職員は、賛成派が多数を占めている一方で、中学生は半数強にとどまっているということになります。教職員の賛成の理由の主な内容ですが、資料7-2を御覧ください。15ページですが、教職員の賛成派の主な理由があります。割合が高い理由が、「専門的な指導を受けることができる」というのが71.2%。2番目が「休日の参加が強制されなくなる」というふうになっています。保護者の理由を見ていただきますと、9ページに賛成の理由がありますが、1番の理由は教職員と同様で、「専門的な指導を受けることができる」2番目が「教員の負担が軽減される」ということで、保護者は教員のことを気遣ってこういった答えになっている状況です。それから、中学生の賛成の理由が、4ページですが、これも1番の理由が、教職員、保護者と同様で、「専門的な指導を受けることができる」2番目が「休日の参加が強制されなくなる」という結果が出ています。

次に、「どちらかといえば反対」の意見で多かったのが5ページで、中学生の

1番が「生徒の様子分かる教員が見た方がいい」ということで反対。2番目が「平日と休日で指導者が異なり、生徒が混乱する」ので反対という理由が出ています。保護者の反対意見はどうかというと、10ページになります。反対理由の1番が、「平日と休日で指導者が異なり、生徒が混乱する」これが1番の反対理由。2番が、「教育活動として生徒の様子分かる教員が見た方がいい」というような理由となっています。16ページで教職員の反対意見がこちらです。1番に多い理由が、保護者と一緒です。「平日と休日で指導者が異なり生徒が混乱する」2番目が「教育活動として生徒の様子分かる教員が見た方がいい」というもの。それからもう一つ、「大会・コンクール等での指導者の連携が心配である」ということになっています。

続いての質問ですが、資料7-1に戻っていただいて、2ページの真ん中の質問になります。「平日の部活動についてどのように考えますか」については、教職員、保護者で1番多い割合だったのが、「できる部活動から段階的に地域移行するのが良い」中学生については、「地域移行はせず、自由加入制の学校部活動として行うのが良い」という結果となっています。「学校部活動として行いたい」という意見は、保護者も2番目に高い割合となっていますが、教職員で見ただくと、6.9%と一番低い割合となっていますので、教職員については現在の部活動を継続するよりも、地域移行への思いが強いということが分かります。

次の質問、「平日の活動が地域に移行した場合、指導者の都合によっては夜間の活動になることが考えられます。そうした状況をどう考えますか」については、「夜間はやめた方が良い」という回答も一定数いましたが、大勢は「条件に合った活動を選択すれば良い」という回答となっています。

次に7-1の3ページを御覧ください。教職員と保護者への質問で、「部活動が地域に移行した場合、指導者として活動したいと思いますか」に対して、「指導したいとは思わない」が教職員が77.5%。保護者が91.3%と大勢を占めましたが、「指導したい」と思う教職員、保護者が一定数いることが分かりました。では、この「指導をする場合に、平日なのか休日なのか、どちらも指導できるのか」という質問は、次の下の回答となります。やはりこちらを見ると、教職員は、休日はあまり指導をしたくないけれども、平日なら指導をしてもいいという意見が少し多いように受け取れます。この指導をしたいという方がどんな活動が指導できるかというのは、資料7-2の18ページに書かれています。教職員については、バスケットボールが一番多くて、次に剣道、吹奏楽、野球といったものが教職員の指導ができるということになっています。では、保護者はどういった指導ができるのかというのが、13ページに書かれています。保護者については、13ページを見ていただくと、野球、ソフトボ

ール、陸上、水泳、総合型スポーツということで、種目を固めないジャンルについても指導できるといった回答がありました。こういった指導をしたいと答えた教職員、保護者の中で、「指導に当たっての条件は」という問いが最後ですが、教職員、保護者共に1番目が「時間帯」と答えた割合が一番高かったです。2番目が教職員は「報酬」、保護者は「曜日」となっています。3番目は職員が「曜日」、保護者は「学校施設の利用減免」という結果となっています。

資料8については、現在の吉田中学校の部活動と担当教員の一覧となりますので御参照いただければと思います。担当教員の中で黒星マークについては、部活動指導員で、町の会計年度任用職員として勤務している職員となっています。また、17番のなぎなた部については、今年の8月に廃部しましたので、現在吉中の総部活数は20となっておりますので御承知いただければと思います。事務局からの説明は、以上となります。

○田村町長

事務局からの説明が終わりました。では委員から意見ををお願いします。

○塚本委員

部活動を地域移行する流れは、避けられないと思うので、具体的にどうしていくのかということですが、私は教育委員会の生涯学習課の方で現在やっている、地域の皆さんがやっている様々なクラブ活動のようなものと同じような形で整備していくということを期待しています。部活動で子供たちにそういう活動をしてほしいと願っているながらも、自分たちでは保護者も含め、ほとんどが指導者にはなれない。9割以上がなりたくないというか、なれないという人なので、その辺は行政で支援していかざるを得ないなと気がしています。現実、小学生が楽しくやりたいという回答が多くて、中学になると競技志向になるころもあると思うのですが、今の小学生はそう考えているので、そういった環境のクラブ活動が求められている気がしていて。そういった指導方法についても在り方も含めて、町として方針を出して、地域活動としてやっていくことをする必要があると考えています。

現実、明誠高校3年生の杉浦君と水野君。優勝した彼らは吉田ACで活躍していた2人で、洛南に行った田村君と大石君も、ACで活躍していた吉田中学校を代表する陸上で活躍した選手ですが、彼らもAC、クラブ活動で競技志向の中で成長していったと思うので、かならずしも部活動でそういう指導を目指さなくてもいいのかなど。地域のクラブを育てていく、そしてそれを支援していく、行政でできる限りの支援をしていく、自己負担も含めてですが、というのが理想的な形じゃないかなと思っています。

○増田委員

具体的なお話はできないのですが、今回の地域移行というのは、非常に大きな転換期、スポーツとか文化芸術の本来の姿に僕はなるのではないかと思っ
ていまして。スポーツや文化芸術を通して、自分の人生を豊かにできればいいわ
けで。例えば、勝利至上それでもいいですが、それだけではない、本当に気軽
に楽しんで年齢を重ねてもできるというようなことができる環境になるのでは
ないかと思って非常に期待しています。ただ、やっぱり両方あると思うのです
よね。その世界のトップに立ちたい方もいますし、趣味として長く続けたいと
いう人も。だからその両方が叶えられるような施設が、なるべく多くの分野で
増えてくるのを望んでいますということでしょうかね。

だから、極めたい人には非常に専門的な指導ができる環境をつくり、趣味と
して取り組む方にはなるべく敷居を低くして、気軽にいろいろなスポーツや文
化芸術を掛け持ちで楽しめるような、そういうものができればいいなと思いま
す。

○中村委員

大道芸ワールドカップの問題があった時に、ああいう発言があつて、すった
もんだしたのですが。大道芸ワールドカップの時に、理念というのはあつたの
かなって思ったのですよ。そういうことを考えた時に、例えばこれも地域移行
って、地域移行にすることが前提になっているのだけれども、大切なのは何か
という、何のためにそれをやるかということだと思ふのですよね。部活動を
やってきました。子供たちを育てていきます。その時に大事なことは、子供た
ちの人間性を豊かにしていくということなのか、それとも生涯体育としての楽
しさだとか、そういったものを育てるのか。何のためにやっていくのかという
議論をちゃんとやっておかないと、それこそそれぞれに分かれた時に、方針が
まちまちになったりすると、大変なことになるなと思いますね。だから、移行
の仕方の問題もあるのだけれども、その核になる、じゃあどういう活動をや
っていくのかというようなことを十分に、何がいいのかは分からないですけど、
それを十分にやっておかないと、後々問題が出てきて、勝つのだとか子供を育
成するんだとか、楽しければいいんだみたいな議論が、後でグチャグチャする
のはよろしくないなという印象を持っているぐらいですかね。これが大事じゃ
ないかなと思いますね。

○北澤委員

地域移行にあまり反対がないということが印象的で、皆さんも先生たちの多

忙化も分かっているしやっていて、それもあって、そもそも学校で全てを請け負う必要はなかったというのも、すごく長く議論されてきたことだと思うのですが。今回は、休日の部分だけ先行して移行していくということだったので、できる部活動とできない部活動というのが出てくると思うんです。それで土日活動している部活動というのがあって、練習をやっているが、試合に先生が来ないという、保護者が連れていくとかっていう。それができるならばそれでもいいのですが、多分競技的に指導者が付いていかないといけないというのはあると思うのですが。そういったところで、上手く子供たちが頑張ってきたモチベーションを崩さず発揮できるような環境にできるのかどうなのかというのがすごく心配なところではあるのですが。子供たちの部活動というと、強制的に部活は何かしらやらなければいけないという考えから、自分がやりたいものを見つけて、興味があるものからチャレンジしてみたりとかっていう部分で、そういった部分は地域移行ができる部分がすごくあると思うので。地域でも生涯学習課がやっているもので、子供たちもそうなのですけども、長く続けられるもの、興味があるものを、敷居が低くなった上で入りやすくなったり、チャレンジしやすくなるというのが、そういった面ではメリットがすごくあるのではないかと感じています。

そんなに競技のことは分からないのですが、サッカーだったり野球だったり、チームをつくる上で、平日と休日を分けることは難しいような気がするんですけど。そういったものをこれから協議していく中で、子供たちのこと、今後のことを考えて、令和5年度から急にやりますよではなくて、段階的に外の他のチームも見ながら、上手く移行していく期間というものを使ってできていくのだったら、この地域移行というものを考えていくのは、すごくいいことだなとは思っています。

○田村町長

部活動の地域移行というのは、基本的に日本の学校はこの部分を、みんな学校が抱え込まされたという面があるんですね。それがやっぱり先生の多忙化の問題となっていて、抱え込んだものを吐き出そうと、先生は先生の仕事だけに専念すると。それ以外は、ヨーロッパ型に変わりつつあるんですね。本当に学校は教育だけ。あとはいろいろなものは子供がクラブ活動などで、お金を払ってやる、そういう形なのですね。問題は、日本の場合は中学校から全国大会というのがあるんですね。部活が外に出た時に、クラブになった時に、お金を払える人、お金を払えない人。保護者がその活動をバックアップできる人、バックアップできない人、格差が生じる可能性があるんですね。それをどうするかという問題と、もう一つは、中学校の全国大会で、一番難しいのが

中体連、この中体連が頑としてあるのですよね。これがどういう方向になるのか、解体してしまえばいいのでしょうかけれども、それをしない限りは中体連というのは独特な権力組織でして、依然としてそういう全国大会、子供たちが中学校の段階からプロ化していくと言うのですかね、そういう傾向が強くなっているというか。それをどんな形に変えていくかということと、部活動の地域移行化は、子供の家庭環境で差別が生じるかもしれませんから、その辺をちゃんとした形にしていかないと、ちょっと問題が生じるだろうなと、そんな感じがしているのですけどね。

○山田教育長

長年続けてきた仕組みを変えるということの難しさというのがありますが、今きくとみんなの考え方で行くと、総論的には、地域に移行することは賛成の意見が多いと思うのですね。総論は賛成だけれども、各論に行った時の課題をどう解決するかというところの難しさで、みんな頭を悩ますだろうと思います。国の方では、スポーツ関係も文化関係も、共に単純に今中学校でやっている部活動の習慣が、そのまま地域で、誰か指導者が替わるというようなことを想定しているのではなくて、目指す姿で言うと、異年齢、大人も含めた地域の中で生涯スポーツ的に、生涯の学習みたいな形でできていくというのが、理想的な姿として描いているので。今町の生涯学習課がいろいろ持っているようなところで一緒にやるというのも一つの姿だろうし。小学校で、スポーツ少年団でやっているけれども、それが中学校も入った、もっと幅広い年齢の中で一緒にやっていくことも考えられるだろうし。

アンケートをやってみてびっくりしたのは、今の小学生も中学生もどんな活動をしたいかというのと、美術が結構多いのですよ。なので、単純にスポーツだけではなくて、そういう文化系に興味を持ってやっていきたいと思っている子供たちも結構いるということを見ると、今年は久しぶりに吉田町の文化祭、芸能祭もできたのですが。ああいうところに子供たちも一緒に入って活動を発表したりというのは、場としてはつくることのできるし。一緒になってそうした活動をする。この前の文化展もそうなのですが、美術的な作品であったりとか、いろいろなものを一緒に行うことも可能になってくるのではないかなと。そういう活動の受皿みたいなものが、どこでどういうふうに組織として整備されていけるだろうかという課題と、先ほど町長が言った経済的な部分が結構これからどうしていくかなというのは大きな課題で。指導者の報酬をある程度確保しなければいけない。それは受益者負担で保護者から集めるのか、それとも行政の方でそこを支援するのか。経済的な困窮者に対しては支援をすることかという、どういう仕組みが考えられるのか。今はまだ国の方も指導者に対する

報酬に対しては、補助をするかどうかの具体的な話が全然出てきていないので。今後どういうふうに経済負担みたいなものがクリアになっていくのか。これは指導してもらって報酬もそうだし、当然保険にも入らなければいけない。今、学校で活動しているものは、全て日本スポーツ振興センターの保険で部活動は対応できているのですが、地域に移行したらそれが適用できなくなる。学校教育活動ではなくなるので。そうすると、保険に独自に入らなければいけなくなってくるので、そこにもお金がまた掛かってくるだろうということもあります。

受益者負担にした場合に、少ない人数のところでは、指導者に対する負担が多くて、多いところでは少なくて済むとなった時には、またどうすればいいかという問題もあるし。だったら学校でやってくれれば、今までどおりお金の負担がそんなに掛からずにやれるとかね。そういう経済的な部分というのが、活動する使用料なども含めて考えなければいけなくなってくるだろうなど。

今、例えば吹奏楽なんかも、指導ができるという人が何人かいたみたいですけど、活動場所を学校と考えたら、学校に今備品としてある大きな楽器を使うということもできると思うのですが。他の活動場所でというと、なかなかそれを持ち運ぶことができないです。もしそれが故障したら、その修繕とか、新しくこういう楽器が欲しいという時に、何十万もするようなものが簡単に入れられるかという時に、なかなか厳しいという問題もあるだろうしという。そういう経済的なものの課題はあるかなと。

それから、いろいろな生徒指導上も含めて、そういうトラブルがもしその集団内で起きた時に、学校はどう関わるのか関わらないのか。そういう指導上の問題、トラブルというところも、きっと今後考えなければいけなくなってくる。中体連、中文連という既存組織との関係。今はそこへの負担金を払っていますから、組織に対して。中体連や中文連がなくなっても、協会とか連盟などそういう大会がいっぱいあるので、そこに登録料を払ってスポーツ関係は全部やっているものですから。仮に中体連組織がなくなっても、大会そのものは他の連盟組織でもできるとは思うのですが。本当に中体連組織がなくなるという方向に行くのか。全国统一した状況で行けるかどうかが大きな問題だと思います。

総論は賛成なのだけど、各論はどういうふうに解決していくのかというところが、町の方の予定としては、今年度末から来年度以降に掛けて、協議会を立ち上げてそういった解決策の検討をしなければいけないと思っているのですが。いろいろな人の意見を聞きながら、どうできるかを模索していかなければいけないかなと思っています。掛川は教育委員会ではなくて、市長部局が主導でやっていますので、市長部局で率先して、平日も含めて同時移行でやっという話で今進んでいる状況ですから、いろいろな先進的に取り組んでいるようなところの情報も入れつつ、吉田町だったらどうできるのか。他市町は一つ

の市町に複数中学校がありますけど、吉田町は1校だけですから、そういう意味ではやりやすいかもしれないですね。そういったことも含めて、どういうふうに対応できるのかということを考えていかなければいけないと思います。

○田村町長

今教育長がおっしゃられたように、まず部活の地域移行に際して、協議会をつくってそこでいろいろな問題を出さないと、分からないと思うんですね。協議会を立ち上げて、その中で考えていく。そういったことを踏まえて始まらなくてはならないと私は思いますね。それをつくることが先決じゃないでしょうかね。

○塚本委員

それに関しては、文化部も両方ともそこで協議するということで。

○田村町長

協議会を立ち上げるということは、教育委員会の方で決めていくということでしたら良かったですか。

○山田教育長

一応今スケジュールは立てて、学校の方にもこんなスケジュールで今後進めていきたいといったことは、一通りは示して。本年度末から次年度初めには1回目の協議会を立ち上げようと思うのですが。まずはメンバー構成をどうするかということから考えなければいけないなど。

○田村町長

やはり総論賛成、各論でいろいろな問題が生じますね。その方向で考えていただきたいですね。

○山田教育長

国の方がどんな方針を出していくのか。今、部活動指導員に対しては、国と県と市町が3分の1ずつの負担で、時間単価1,600円で報酬を出しています。なので、そうしたものも国の方がどのような経済的な支援をしてくれるかというのが、大きな問題になってくるかなと思っています。それを町だけでみるというのは、結構大変になってきますし、指導者もメインでやりたいという人と、アシスタントならという人がいましたけど、では、同一報酬で行くのかどうかという問題も出てきますし。まず課題をいろいろ洗い出しながら。

○田村町長

そうですね。そういったことで、やはり協議会をつくってやっていただければと思います。いかがでしょうか。確かに各論の問題が入っていくと、本当にどこに入っていくのか分からないような問題がありますので、そういったところで、協議会の立ち上げを考えていただいて。では、そういうところで部活の地域移行については考えていただくということによろしいですか。

いろいろと御意見を言っていただきありがとうございました。それでは、本日の議事「TCPトリビンスプランについて」及び「部活動の地域移行について」は、本日の意見交換の内容を踏まえた上で、今後の取組を進めていくということによろしいでしょうか。

皆さんの了解をいただきましたので、事務局はそのとおりに進めてください。それでは議事を終了したいと思います。進行を事務局にお返しします。

3 閉会

○事務局

ありがとうございました。本日TCPトリビンスプランと部活の地域移行について貴重な御意見をいただきありがとうございました。また御意見をいただいた内容については、改めて事務局内で検討させていただきたいと思っておりますので、よろしくお願いたします。

長時間にわたり誠にありがとうございました。以上をもちまして令和4年度吉田町総合教育会議を閉会します。最後に相互のあいさつを行いたいと思いません。一同礼。